

4-8 あらためて防災ということを考えてみる

自然現象により様々な被害に対して、いかにそのものを最小にするのかということが防災ということになります。自然災害は必ず起きるものだし、そのもとになる自然が起こす様々な現象に対して我々は抗することができません。いわば、自然に生かされているということになりますので、自然と上手に付き合っていくことが大事になります。相手をよく知って、自然の動きを見て、その中で一人一人があるいは地域が得をする、損しないという知恵を見つけていくことを考えていく必要があります。何かあれば、その時は何とか知恵が出て、うまくいくというほどの力は残念ながら人間にはありません。

そのために何かを構想する必要があるのですが、その基本は人が動くこと、本気になるということです。そのためには、防災が社会で必要なことであるということの理由と認識が必要です、端的に言えば、何の利益があるのかを考えるべきです。

そのためのプロセスの初めは、発想、着想あるいは気づきですが、我々はこの短い経年の間にも多くの自然災害を経験しています。特に日本列島は災害が頻度も種類も多く、直接ではなくとも様々なところでの経験を持っています。これらの経験をベースにしての生活感覚や情報から何が、どう必要なのかを描く必要があると思います。そして、何をどうすることで災害から被害を最小にするのかを構想するわけですが、地域によって、個人によって事情が異なっていますので、どこでも同じ状況にはならないと思います。それ故に、他人に任せるわけにはいかないのです。この辺は、分析して評価するというような段階を経て検討していくことになると思います。そして、計画とその実践する手立てを考えなければなりません。何をどう進めるのか、目標はどこか、進行させるのに支障となることは何かなどを多面的に考えていくことになると思います。ここで、大事なことは必要なことと欲しいことを峻別しないと、実践するときにごぼれてしまう可能性がありますので要注意で、これを怠ると防災力がついてきません。例えば、地域で防災を考えるときには、何とんでも住民の方々とのコミュニケーションは欠かせません。そのためには消化しやすいメニューが大事で、よそのものをそのまま持ってきてもうまくいきませんし、あるだけで満足してしまってお飾りになってしまいます。今までの経験からいうと、まずプレゼンテーションの方法に工夫をすることです。住民の人の気づきをどう引き出すのかです。地域には潜在的な人的資源があり多くの歴史や知識がありますので、それを引き出すことが必要です。いわば住民の人が得したと感ずることが必要ですし、防災対策は一過性のものでなく継続することが大切ですので、その必要性を身に着けていただくことにしなければなりません。つまりは、できることをできる範囲で行うことが大切なことになりますので、あまり高い理想は掲げないことです。防災は特段難しいことではありませんし、地域のコミュニティーが確かなものになれば、その基礎力は備わったということになるわけで、様々な機会に防災が話題になるような雰囲気作りがポイントともいえます。したがって、防災対策は、よそのあんちょこ（安直）ではなく、自前のそれこそ身の丈に合ったものを自らが作成して実践できるものにするのが良いと思います。